



芳川春海校訂
岡本起泉編輯

坂東彦三郎一流

島鮮堂壽梓

二編下

へ14
2691
6

二編中

へ14
2691
5

二編上

揚州周延

へ14
2691
4





坂東彦三倭一流

揚州周延

二編上

へ14
2691
4



坂東彦三倭一流第二編上之卷
芳川春濤園岡本起泉綴揚洲
周延画島鮮堂綱島発兌



凡そ世の面白くぬりぬり演劇の三立目と草冊子の初編なるが
就中あの冊子の如き素より杯と暗き云訳をせほも何事只
何事も明らう暇看客のお眼が曇らぬ鏡とありし面影を
其まゝに寫し出したる坂東彦三そ結來歴の節々千ヨツ
ヒリ艶を附焼双もゆとり鈍き記者の筆ちのちを長い見物
方の欠の千里み不評の基のち如少いで話さへ築地の善次が
一龍を殺害をさんび見所も委細御覽入色何をもハ即ち
三編をたろふろく

明治十三年六月

岡本起泉題





鳴神五郎兵衛

俠客



五代目
坂東彦三郎

藝子
龍一

小間物屋
黒木屋熊蔵

彦三



南由四十
 面まひて何
 の態ごと寝めりて
 ぬどりドク
 干二全体是
 あんか
 仔細が
 引その仔
 細々々の疾くは
 細して疾るる
 雨々々を手に
 早くと悔れと○

懐中り何
 程りの金と
 取平紙紙
 色んで久た
 後一掃あろく
 是を一杯あろく
 あられと
 運やじ
 仍小まろ六
 市ツと二息
 つたあは



〇此うける
 と替いと
 押止り又も
 小法と立出る
 女へ流
 石の種
 少折南
 飲代おせん
 と是まへに
 俵り破るや
 返すも
 子の奇と

〇此うける
 と替いと
 押止り又も
 小法と立出る
 女へ流
 石の種
 少折南
 飲代おせん
 と是まへに
 俵り破るや
 返すも
 子の奇と

〇此うける
 と替いと
 押止り又も
 小法と立出る
 女へ流
 石の種
 少折南
 飲代おせん
 と是まへに
 俵り破るや
 返すも
 子の奇と

いさよのけほりあはれがきき
厨子一筋さんおきさん
物對面でもさあれ今日おき
さんと一筋さんさびも難儀と



おきさん
教あく下さ
鳴神 妖方小
内様投ヤシ
今日田初め

△同子ひきくそ尾ひき
△せあつて二三日
元おのき
厨子の
せい
ひどう送上
くさくさ
一寸おき
座へ
つて休ん
てお膝
さあ

おきさん
おきさん
おきさん

いさよのけほりあはれがきき
厨子一筋さんおきさん
物對面でもさあれ今日おき
さんと一筋さんさびも難儀と



いさよのけほりあはれがきき
厨子一筋さんおきさん
物對面でもさあれ今日おき
さんと一筋さんさびも難儀と

いさよのけほりあはれがきき
厨子一筋さんおきさん
物對面でもさあれ今日おき
さんと一筋さんさびも難儀と

ついで何卒とけりて又俯むき
 忍びのしほも筋うりゆの始終と
 帯一筋の何あひん桃盛の蓋
 と取上げ持つるうづら状者
 さん一杯の心下さつといふ
 新まき六打せり是の仰ふ
 お膝はが布ありますの
 まとも何うおなは様
 こころでもあつてと
 りんご折清一筋の
 この例一何よりい上
 さるの不徳でもいふ
 ねがぬ命の無ゆるごと



□ 考ふ仲居と共
 小用する等
 と大なる
 長男持
 次 白 上

えんじおん使判と
 今夜は面白使判と
 取らんとするも先と考とい
 まつろ押へ夜時時代い
 自分一様つて定例
 お方があらうと申す
 引寄せられて
 一筋の
 さの何とて天一
 るむ地たるお
 二入の糸の色
 程方さんお
 ほしおと一
 けりて又俯むき
 忍びのしほも筋うりゆの始終と
 帯一筋の何あひん桃盛の蓋
 と取上げ持つるうづら状者
 さん一杯の心下さつといふ
 新まき六打せり是の仰ふ
 お膝はが布ありますの
 まとも何うおなは様
 こころでもあつてと
 りんご折清一筋の
 この例一何よりい上
 さるの不徳でもいふ
 ねがぬ命の無ゆるごと



て
 今宵は二層
 是の思
 今小用
 のに打
 一筋
 破
 歩
 共
 家
 □ よりお茶

三二上
 乙



<p>龜地本問屋 錦繪</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 坂東彦三倭一流 三篇 讀切</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 白葛阿般系願末 三編 讀切</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 島田一郎梅雨日記 五編 讀切</p>
<p>編輯人 岡本勘造 出版人 網島龜吉</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 德川年代鑑 折本 一冊</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 澤村田之助曙草紙 五編 大尾</p>	<p>芳川春海閣 岡本起泉齋 命養生善惡鏡 折本 一冊</p>



三三二

六



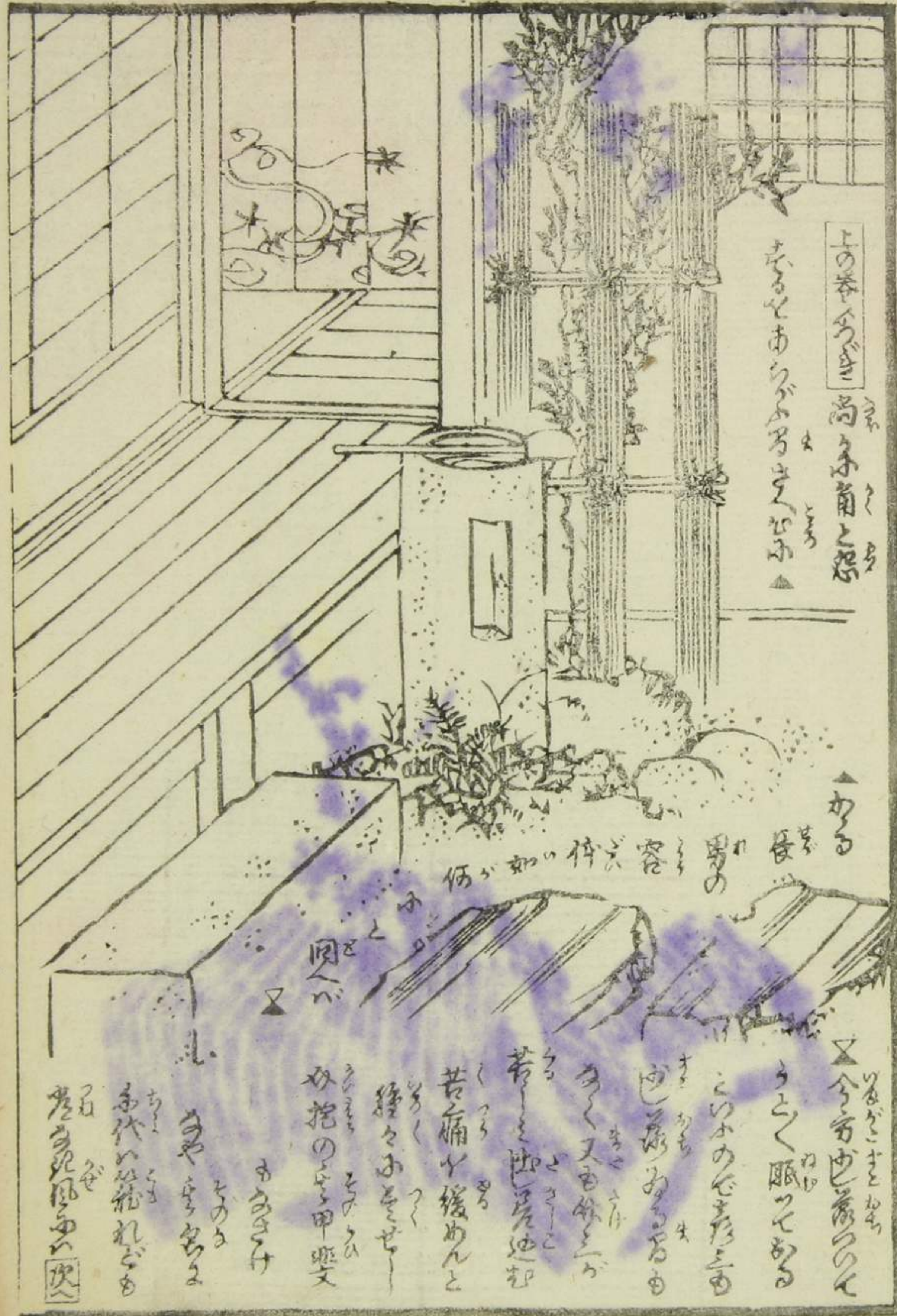


芳川春房校閱
岡本起泉編輯

二編中

~14
2691
5





上の巻の...
 たるとありがらるるさかふ

何れが如く...
 何れが如く...
 何れが如く...

又今方...
 うとく...
 この...
 若くは...
 苦痛...
 種々...
 必...
 必...
 必...

特 14
 2691
 5

坂東

彦三

一流

川寛

畠本流

圓延



二海人

中
 巻

Red square seal impression.



つぎはとまき
 芥子も神也
 味と毒も
 遠
 小栗敵
 まく敵
 ういさのく

災厄のわつる月日と限ゆしと
 何れも清く真澄しが好くとも
 べつと多しねがも敵も良しと出せ共
 とつた同而して去り寺向の津中をえ
 葉巻のしは是と後幸の寺一為とが

〇別所人を斬んでその
 長とを喰せ世に入替
 るとま之丸をばさるこ
 敵一之はははは新地
 鳴とやくはむの押度き
 男と伴判らひ考とせ六段の
 一社が難儀を救ひて縁はして
 其の後の内小判深一と云編ま
 の化の系言子言はまふとさる
 とさうたを借り頼り小栗敵とあつ
 るのさふお籠のどくは捕く是と
 けらるる悪徳とお角がさぬくりうの
 事と怒つが上ふ二人が田代の横着



おと
 けと及むるの者縁とやいひまき
 〇おもをりな家の後家お鏡が難儀等と
 体とを執者と後ひの多しと骨をせいの
 是意のすつぬまをいと鳴くあめあふ心故と
 難儀と
 けとけ
 獲前と
 お角小栗
 坊と救つせ
 まと身小借せて
 退引さませ
 又後をせん什畧
 るけしうともはははが

一社の方
 小政
 けらるる悪徳とお角がさぬくりうの
 事と怒つが上ふ二人が田代の横着
 まく敵
 ういさのく
 〇別所人を斬んでその
 長とを喰せ世に入替
 るとま之丸をばさるこ
 敵一之はははは新地
 鳴とやくはむの押度き
 男と伴判らひ考とせ六段の
 一社が難儀を救ひて縁はして
 其の後の内小判深一と云編ま
 の化の系言子言はまふとさる
 とさうたを借り頼り小栗敵とあつ
 るのさふお籠のどくは捕く是と
 けらるる悪徳とお角がさぬくりうの
 事と怒つが上ふ二人が田代の横着



一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆



一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆

一花の
 今
 空の
 救
 朋
 不
 又
 嘆



さすね一統さんねがめしく上ッてい
 の病室の中あしくお家の春の枝な
 信どとりよも外であうません今四日

△お若うれとまは
 南さんグロ日
 あると死伝文
 と持て来て
 通すといふ
 んまの
 中にも

のあつ
 百通
 いらはちや病室で誰
 らううそちほく
 さま長小坊も仕
 松ごののと花か
 てく此佛性の
 坊てあう坊ッ
 がまのう
 是ご今うお命
 りつこのも
 孔子さんが
 心如
 白内
 後と



信か節の代人で日外お南より申連さ
 金子と頂戴お出ま〜と波〜一統い
 打致さき徳さん何とひひるる
 ぬりど先成寸園〜と死
 か南さんおねんて
 三十あごひ徳所
 うう備て黄ひお南さん
 宛て伝文と入てま〜とい
 あつごまの伝文ありおてある期日
 運りまの利足も心備て世も返
 ほごことまかりのせお徳徳が返〜といふその
 伝文がけ分おあるといふ不心儀な法ごま昔生金の
 受取と持てお出り申ア年受取と面てわ〜△

あのとあつてま 俄らうが伝文通り
 お金を渡〜し渡 再と揃て世のあや
 二三交儀但せご ぬいねトおねい
 りるおれて

△まごともろりて
 田柄もさち船も
 通の魚心あれた
 水心ナそを分り
 あなつことおのろ子
 ねく人へそけいふ
 ふうぬの外面お菩薩の 一の次



△ 以免とあまひ入来し舞の舞
 かきうの形造風含箱と
 是と想思がなるもの思
 つくせ
 一統の不
 審そり
 小あえ
 居目あふ
 へと驚くせ
 〇 〇 〇

中しそり
 あふらあえう
 みの
 ぬきるとまて

◇ あらうけ
 て
 ら や
 〇



↑ 只ひと筋
 こそつりの形虫と以てや
 とむこと横まくの想一さふ〇

つぎ

〇 只俯むいて一統の何といを等々集る
 想ふふとまてませる様の如く静さ
 口惜と胸あはれ思返む瘰の若一さふ
 今い忠かうの去るささるく考とあひ

ハツタと
 颯と今分々の
 声と後しして
 只と款との二たせ〇
 嵐と鳴るめ如何いせんとあふれも△

知る是をそを
 屋のお敷あて英
 なるよをのを
 してつと想らふ初射
 面の横投あて候して
 此方と横むき想思さん
 異つと而であのまうと
 始終の形あいつと今
 表で静らばはま
 ながまあついであひ
 出たのり久しいね
 お南が来々大なる
 出入坊の次へ

運り候て
 何と生相
 狭由ツレ
 文と持て
 懸まづく
 由是生換
 と戻して
 名合ふ
 受ふて
 足とお
 此こそ
 業を
 へ及



つけられ
 申の
 不
 自由
 一句
 男
 と
 さげ
 志の
 為

次へ

つき
 さん
 二十
 小
 の
 同



一
 十五
 と
 合
 生

唐三

七

ついでに金も

あつたあ

そんあ

是で真け

ますと

証文と

及重

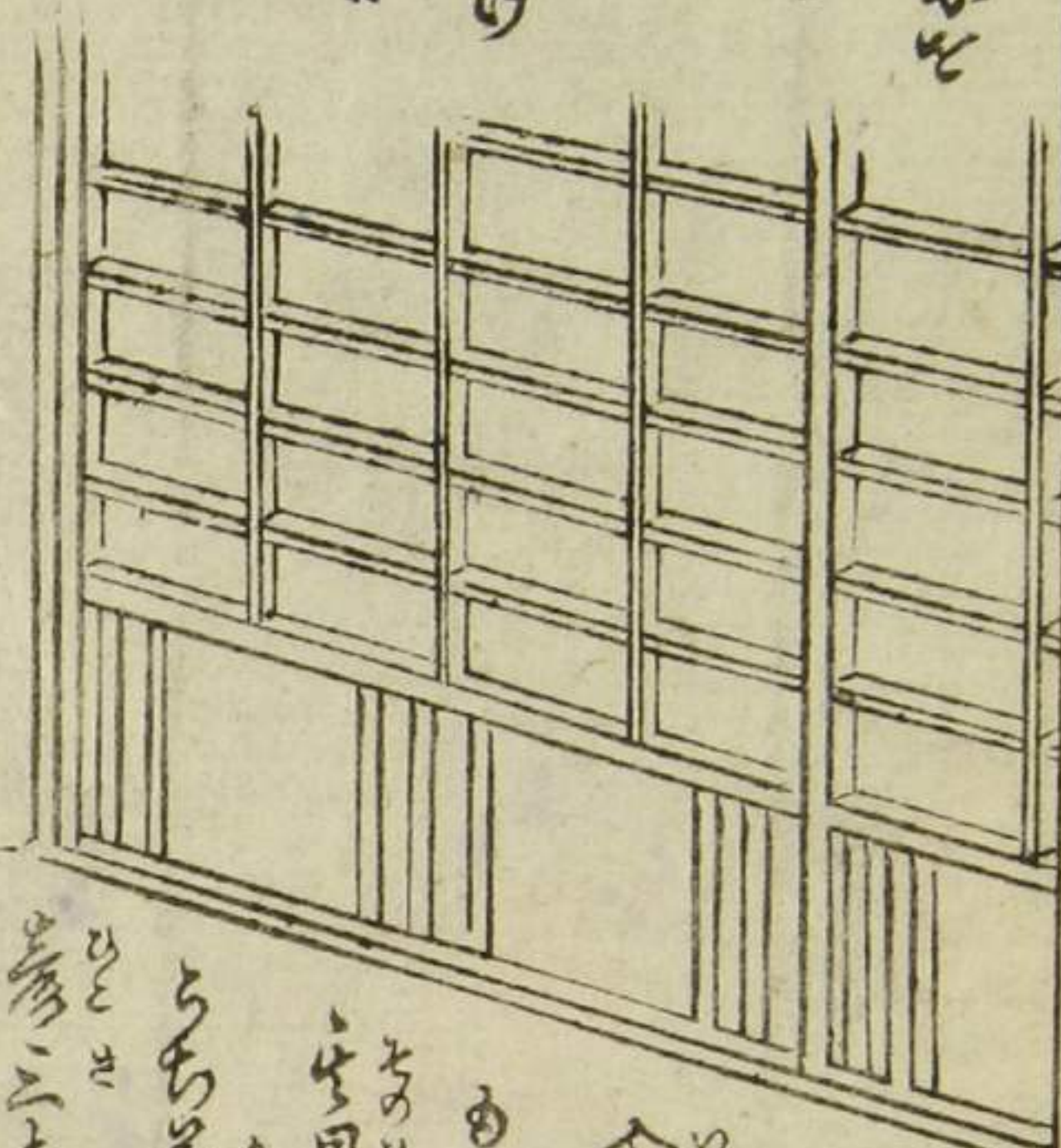
て遊ぶか

如く出て

あつて一箱が

何とかれと

中さううと



あつて一箱が
何とかれと
中さううと
あつて一箱が
何とかれと
中さううと

三十一

△此は由被へた

且常んて其せむも

今ハ清ら入さ

由なるく

生田と送る

らあ兼て

ひとと

考ふと

深

あ

立

一箱が今ハ

病室で難治

◇

あり

後面

皮も

只一人

尋ねて

来しあ

とに一箱も

あ惑の終り

せむと信是

味多の立れど

箱波格ゆて

あ

いふを考ひ

生を考ふと

助けて

心却つて早う

ひとと

考ふと

收ひ成る

料

理

底

あ

考ふと

多くあれて

目言はひ

私と云哉世

のそと後ハ

更ハ次へ

ぬきどつとせ
お殿の押とあ
私らがねしと
出しぬけ小あつた
あつたあ
一に今のけしは定め
不審めあれさうが安ハ
折入てお前さんおあ
中は車かと和しそ
後をたあておめは仔細と
いふ一且其後お前あ
あつたあ
紙へこれとお殿あつた



ひとと
考ふと
收ひ成る
料
理
底
あ
考ふと
多くあれて
目言はひ
私と云哉世
のそと後ハ
更ハ次へ

つき
遠くせば
やとふれい
何れも
ひあはれ
いどあつめ
うたれはあめ
先登雅儀と
縁どめ
おのち
のちのち



周延画

つき
遠くせば
やとふれい
何れも
ひあはれ
いどあつめ
うたれはあめ
先登雅儀と
縁どめ
おのち
のちのち



芳川閣
岡本綴

あひ入るその
あふるその
あふるその
あふるその

芳川春晴閣
東京奇聞

七編
五編

御所樓梅松録

十五編
一折本

島田一郎梅雨日記

五編

命養生善惡鏡

一折本

白草阿般系顛末

三編

澤村田之助曙草紙

五編
大尾

坂東彦三倭一流

三篇
讀切

徳川年代鑑

一折本

亀地本問屋

編輯人 **岡本勘造**
出版人 **網島龜吉**





島鮮堂壽梓

二編下

へ14
2691
6



けん

14
2691
6
東

ひろき

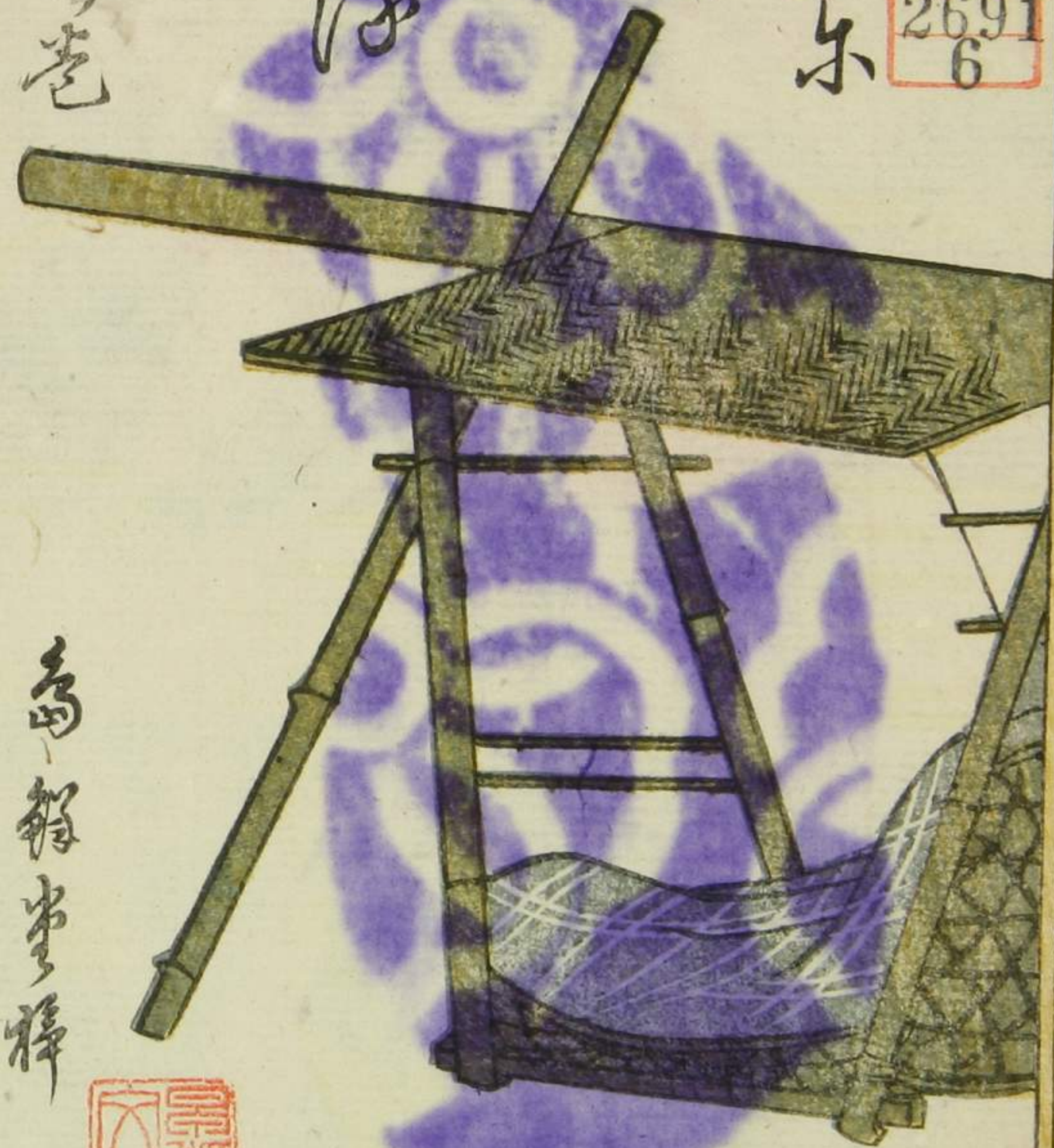
ゆま

一詩

二編

下の巻

高橋半平



○青楊や維波のまゝに養うるにさあぬおひ
 結がれて粹の果るる七の身おもはむ
 意の園まゝも我を粹らぬの意を
 お鏡の鏡の面持影んで降りし後へ
 返り事のゆきゆきと今日も明日も
 送る回一絶方々いはいどりと一封の
 手紙どうとせしふ取も遅くと開き
 とるるとさるる前日のれと連て折の人を
 返却する首と死しお札の一条と付と
 名をそ依の通り
 張せしとさるる月
 のみと若しとある
 不釈の裏く胸と結めて



そ 心 せ 續 下
 の後の
 在河
 と煙
 ね竹
 張ま
 候ハ次

つぎ今一服と付に
虫を烟草も兎角
あめりかちつまる
烟葉の二粒

がぢれく付けらる齒の痕い
又あふとの記念とも見えんと
あゝ如響響の番ひもあふ
引あきけ人々があはれと惜む
そのあふ
中あは彼のあはれの五帝あはれ
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと



あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと

故々に飾り
飾りあはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと



あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと
あはれあはれとく送りゆくと



軒のやと
 下世を違うに
 怪しげな男の
 と見届け事の
 後(あ)と
 知れずや二
 人の老女
 衣服と腰
 互ひあう事
 さむい結の
 相油と石除
 みる(お)の



相油みせされ
 かなむか
 悪うこそ
 ありやせう
 心え
 お体
 るせ
 とられ
 中
 主客の
 後の妻
 いええ

あり何やうか 柳柳(やなぎ)のついでとまらぬ
 おんもなれぬまゝ 年若(としわか)き女(おんな)や平(へい)審(しん)をうに
 四(よ)辺(へ)とんぞーモと女(おんな)の情(なさけ)らふありふふや海(うみ)を筋(すぢ)
 だるの板(いた)をさへ一人(ひとり)の身(み)をぬが 如何(いか)にも女(おんな)
 休(やす)むの道(みち)の程(ほど)の縁(ゆかり)業(わざ)でもめらふまはらぬの
 ねん板(いた)たさへ女(おんな)の骨(ほね)おひをぬ 子(こ)をえらぬまはらぬ
 渡(わた)板(いた)の道(みち)踏(ふ)まはしても 僕(わが)の孝(こ)老(らう)の如(ごと)く
 いらぬ後(あと)とわしてまゝ 親(おや)もろくそふ天(あま)の

乳(ち)が
 物(もの)とあさる
 産(う)まの標(しるし)定(さだ)め
 櫻(うづ)打(うち)のりと雨(あま)月(つき)
 おんまはらぬ
 手(て)ぬぬまはらぬ
 打(うち)板(いた)中(なか)
 次(つぎ)
 乳(ち)が
 物(もの)とあさる
 産(う)まの標(しるし)定(さだ)め
 櫻(うづ)打(うち)のりと雨(あま)月(つき)
 おんまはらぬ
 手(て)ぬぬまはらぬ
 打(うち)板(いた)中(なか)
 次(つぎ)

三三
 二下

三三
 二下



卷之三十一

逃げとて引
 捕まふと云で逆の取り
 生怪極一押指すゆて
 女の悲しき口端さふゆて
 多ゆて多と涙の救ひ
 ととへどぬへすすく古堂ふ
 とふ人さ人も暴々色二人の男
 へおひかきみかき返入る女
 抱きつた既不膚を釋さんと
 さるおまの涙のさるおま
 氣茶の胃が物ともゆゆす

一人の女の頭の筋
 抱んで引退ると見るより
 怒りておうち今一人と突削
 有あふ息杖あるゆて二を打た
 一は外懸を打て髪
 せんせんとおまの恨め仔細
 て先年お角と共ふ大坂と
 是退るゆゆす

さん不測な
 せか極と云ぬ
 一統の口外
 多々懸花か
 思計を
 子に共



舞坂者
 世経
 元送
 二男ハ
 其宗不掛絶不
 其杖傍不投
 其杖傍不投
 其杖傍不投
 其杖傍不投



芳川春海閣
其名も高橋
春海のの神
岡本起泉閣

東京奇聞

七編
よし切

御所樓梅松録

十五編
山由編

芳川春海閣
岡本起泉閣

島田一郎梅雨日記

五編
よし切

命養生善惡鏡

折本
一冊

芳川春海閣
岡本起泉閣

白草阿叢系顛末

三編
よし切

芳川春海閣
澤村田之助曙草紙

五編
大尾

芳川春海閣
岡本起泉閣

坂東彦三倭一流

三篇
讀切

徳川年代鑑

折本
一冊

龜地本問屋
錦繪

編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出版人 網島龜吉



坂東ばんとう

夷ひこさ

三やまといち

流りゅう

貳編

芳川春濤校閱
岡本起泉編輯
揚州周延圖畫

島鮮堂發兌

へ14
2691
4-6